

春日寛平

高坂弾正の子孫とされる春日寛平(文化 9～明治 19 年 1812～1886 年)は、江戸末期から明治にかけての大阪の著名な漢方医・医師。号は載陽。50 歳の時、在阪のまま備前侯の医官に任ぜられた。寛平の家系は岡山藩池田家に代々仕えた。嘉永年間、大阪で「指を屈した(第一の名医)」と評され大関(最上位)に位置づけられた。大阪・船場で活躍し、緒方洪庵(蘭学者・医師)とも交流があった。長岡謙吉(海援隊)、藤沢南岳(儒学者)、篠崎小竹(儒学者・書家)、廣瀬旭莊(儒学者・漢詩人)、高松凌雲(幕臣・医師)及び大塩平八郎(儒学者)らと関係が深かった。国学者の萩原広道(国学者)が篠崎竹陰(儒者)、緒方洪庵及び中天游(蘭学者)らとともに寛平宅に集まった際の講筵筆記「源氏物語評釈」は、源氏物語の「古注釈の最高峰」と評されることもある。

春日家はその後も医師として活動している。

(川畑紅葉著 2026・2・10)



「春日寛平」(載陽遺稿 卷上、春日頤著、春日育造編、大正 12、国立国会図書館)